
エイプリルコード

神風大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイプリルコード

【Nコード】

N1714T

【作者名】

神風大和

【あらすじ】

突然、能力に目覚めた生粋の日本人尾坂享平

彼は自分の力に戸惑いながらもとある能力者機関（半分無理矢理（脅しあり））に入ることとなった。

そして尾坂恭平という名を捨てコードエイプリルを名づけられる。

エイプリルとなった享平は癖の強い仲間に戸惑い、振り回されながらも少しずつ自分という存在に気付き始める。

プロローグ（前書き）

まあ、墓地ぼとやろつかにゃと・・・

プロローグ

「はあっ、はあ！はっ——」

真っ暗闇の中、少年は周りの目もくれず走っていた。

身長160cmぐらいで、顔、身長、体格、全てが中学生くらいの平凡さでコレと言った特徴は無い。

いや、一つだけ異常とみれたのは彼の足の速さだけだろう。

傍目から見れば100mを6秒で切れるほどの速さでなおその状態で数時間近く走っていたのだ。

「くそっ！何なんだよこれ！」

誰にともなく悪態をつく。

しかし、どれほど喋ろうと物にぶつかろうとも足の動きだけは止めない。

否、止められない——

彼の本能が自分自身の危機を伝えていた。

故に止まらない。

ガタン！

少年は目の前のゴミ箱に気付かず盛大に蹴飛ばした後、頭から地面へと前転をするように転んでしまう。

「がっ……いつっ……」

足には浅くは無い傷を負い、体力も限界に近い。

立とうとすると足はガタガタ震え最早、使い物にならない。

頭、内臓、腕、足、体全ての部位が酸素を求め、足？く。

まさしく絶体絶命である。

「ああ！もう、動けよ！くそがっ！」

いくら自分を叱咤しようとも、体は休息を求める。

「ふう、君は速いんだな。何度か見失いかけたぞ」

漆黒の中、闇を裂いて現れた一人の男と一人の女性

男は金髪、蒼の瞳を持ちこの暗闇の中でも良く分かるほどの美青

年だった。

加えて隣の女性も黒色のスウェットを着ておりその綺麗な腰のラインと豊胸な胸が浮き彫りとなって彼女の扇情的な顔となんともミスマッチしていた。

ただ、この闇夜の中にいる二人は何処か狂気が漂っていた。

「なんなんだよ、お前らは！」

そんな男女二人に少年は必死な形相で敵意を示す。

「だから最初から言っているでしょう？あなたの力が必要だって」妖艶な女性が一步前に出て腕を腰に置いた状態で喋る。

「だからその力ってなんだよ！俺はただの受験勉強で忙しい中学生だ！」

正確に言えばまだ中三になったばかりで勉強などやってなく、ほとんどの時間を部活動に費やしている……だが。

「……あなたバカ？ならあなたはどうかやってここまで……最初の街から四つも離れた所にいるのかしら？」

「そんはなの走ったに決まって………っ！？」

少年はようやく意味を悟ったようだった。

顔は驚愕に彩られされど信じたくないように顔を背ける。

「ようやく理解したようだな。そこで提案だ。我々は君の力がほしい。来てくれるのならば待遇は保証しよう」、

いつの間にか少年の目の前にまで迫っていた男が、ゆっくりと手を差し伸べる。

「……嫌だと言ったら？」

「半殺しにして連れ帰る」

即答、今までの軽い調子とは一転して男の双眼は真剣そのものだった。

そして

ゾクリ――！

いきなり訪れた冷たい感覚に身を震わせる。

何が起こったのかさえ分からない。

本当に唐突にその寒さは自分の身へと迫ってきた。

例えば比喻ならば例えこの世に魔法が無いのならば例え科学が無限に発達したのならば例えようなない白銀世界がそこに眼前に実現した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

不覚にも少年は見惚れてしまっていた。

氷の結晶一つ一つが顕界する世界そのものに。

「くくくつ、すごいだろう？これが力・・・・・・・・能力と呼ばれるものだ。まあ、それは置いといてだ。もしお前がこちらに来なかったとしても今までの生活に戻ることは不可能だ。お前は既に力に目覚め始めている。もし、能力を暴走させてしまえばお前は化物扱い。親友にも家族にも大切な人にも蔑まれて死ぬだろう。ならばそうなる前に我々と共に来い。尾坂享平」
おさかきょうへい

再び手を差し伸べてくる男。

享平と呼ばれた少年はわずかだけ迷った末に今度は敵意を見せないしっかりとした面持ちでその手を握った。

「ようこそ。未来と過去の狭間、インビシブルへ。我々は君を歓迎しよう」

男はふつと微笑む。

次の瞬間、享平に抗いようのない強烈な睡魔が襲いかかってきた。ぶつりと制御を失った人形のように倒れ込む享平。

それを見ていた美男美女、一人は終始不敵な笑みを絶やさずに、もう一人は最後まで無表情を貫いていた。

季節は春、4月8日。辺り一面には少し遅咲きの桜が、少年を歓迎するように咲き誇っていた。

第一話コード

夢を見た。

すごく現実味のある夢だ。

自分が能力を行使して大量の人を殺す夢。

悪夢。

親友を家族を恋人をかけがえのない人を罪の無い人々を殺して殺して殺しつくす殺戮劇。

思わず吐き出したくなる中、そんな中でも自分は嗤っていた。嘲っていた。死に逝く人々を。紛れもない自分自身を。

「うわあああああ!!」

真っ白な個室の部屋に少年の絶叫が響き渡る。

しかし、あれほどの大声にも関わらずこの部屋には誰一人存在しないし、誰一人として訪れる者はいない。

少年、尾坂享平は荒い息を整えると周りを見渡して状況を確認する。

（ここは、いつたい？俺は何故・・・・・・・・・・っ！そうか俺は奴らに付いていくと決めてそれから眠気が・・・・・・・・・・とするとここはいつたいどこなんだ？）

本当に真っ白以外特徴の無い部屋だ。

唯一あるのは無機質な音を上げる医療器具しかないだろう。

そしてその医療器具は自分に取り付けられている。

しかし、とりわけ痛みも異常も見受けられないので少なくとも危

険ではないと判断する。

（あー、やばい。すっごい喉が渇く）

絶望的に喉が潤いを求める。

もう一度周りを見渡してみるが、やはり医療器具以外見当たらない。

「あのー、すみません。誰かいませんかー？」

一応呼びかけてみるが、返答は無い。

「ああ、もう駄目だ。この部屋出よう」

取り付けられていた医療器具を壊したら大変だ、と丁寧に外し、ベツトから降りる。

とりあえずジャンプや足を上げ下げしたりと体に支障はないか確認するが、特にこれといって違和感はない。というより前よりも若干動きやすくなっていた。

（これも能力というやつなのか・・・？よくわからんな）

小首を傾げながら純白の壁の前に立つ。

「あ・・・・・・」

ここにきて重大な事に気付いた。

この部屋さつきから扉が見当たらないのだ。

「おいおい、まじかよ」

ため息一つ吐くと壁に寄り掛かる。

何処かもわからない、扉さえも見つからない真っ白な部屋に取り残された一人の哀れな子羊。

「ははっ、笑えねえー」

渇いた喉に渇いた笑い。

もう駄目かもしれない・・・そう思った時だった。

急にカシユンと何かが開いた音がしたと思ったら自分が後ろ向きに倒れてゆく。

「え？ちよっ！おわあ！？」

しかし、待ちかまえていたような大きな衝撃は無く何故？と思いを上げてみればあの夜出会った男と目が合った。

「まったくお前、こんなところに立ってんじゃないよ。危ねえだろう」
「う、ごめん？」

慌てて男から離れ、たくつと男はめんどくさそうに溜息を吐く。
「あらあら、見せつけてくれるじゃない？」

ここでようやく気付いた。

男の他にもう一人白衣を着た女性がいることに
紫色の長い髪に豊満な胸、そして大人っぽい顔は驚くほど整って
いた。

「気をつけろよ。こいつマッドだから」

男が隣の女性を親指で指さしながら不敵に笑う。

「ちよつと！失礼じゃない！私はマッドはマッドでも優秀なマッド
よー！」

（いや、マッド变わんないじゃん）

思わず心の中で突っ込んでしまった享平であった。

「こほん、では改めて自己紹介するわね。私の名前は古里雅美。ま
ーちゃんの良いわよ」

「はあ。どうも。俺の名前は尾坂享平です」

「ええ、知っているわよ。よろしくね。享平くん」

「はい、よろしく願います。雅美さん」

次に二人の視線が壁に寄り掛かっていた黒の皮ジャケットを着こ
なしている男に集中する。

「うん？どうかしたか？」

それに男は疑問を持って返す。

「あなた、この子に自己紹介した？」

それを聞いて男はようやく理解したようだった。

「ああ、すまん。俺の名前……コードネームはプロウスだ」

コードネームという単語に首を傾げる享平に雅美は説明を付け足す。

「コードネームって言うのはね、この組織での名前みたいなものよ。この組織に所属している人はみんな作ることになっているの」

「へー、そうなんですか。と言う事は俺の名前も？」

もちろん、と雅美は享平の問いかけに答えると一枚のカードを渡す。

「そのIDカードには貴方の能力とこの組織でのコードネーム、この施設を移動するために使うバーコードが記されてるわ。後、それ無くすとこの施設での移動が出来なくなるから気をつけてね？」

享平は自分のIDカードを凝視したまま動かない。

雅美は享平を気にする様もなくさらに言葉^{エイプリル}を続ける。

「貴方の能力は風。コード名はA p r i l」

第二話早き第二の人生

「コード名エイプリル……」

さつきからその名前だけが頭の中を反響させていた。

「……なんか微妙だなあ」

自分に与えられた名前が不満なのか愚痴る享平ことエイプリルに黒色の皮ジャケットを着ていて見た目ホストにしか見えないプロウスは眠そうな眼差しでエイプリルを窺める。

「別に気にすることないんじゃないか？」

「うーん、名前って変更できないんですか？」

プロウスを華麗にスルーしたエイプリルは、凄まじい速度で機械を弄っている雅美の方を見て問いかける。

「できないわよー。名前は基本、組織が自動的に決めているの。結構的を射た名前が多いのよ。名はその人を顕わすってね」

片目を瞑りウインクする雅美

「……エイプリル、四月？何処が俺を顕わしているんだ？」

それを聞いたプロウスと雅美は何を言ってるんだコイツ、と当たり前のように。

「「四月バカ」」

と答えた。

「いや、俺の扱い酷くない!？」

エイプリルの叫びは空しく、施設内に木霊したという。

パシュン——何一つ違和感のない自動ドアの開く音。

目の前にはさつきまでの味気ない空間とは少しだけ違い如何にも近

未来基地内部といった道が続いていた。

無機質に張り巡らされた鋼の道を照らすのは均等な道幅に分配された蛍光灯。

「うあ……すごいな」

思わず、感嘆の思いが漏れる。

彼、エイプリルは一人の男としてこういった秘密基地に憧れていた事があった。

そう、あった……。のだ。今となつてはそんな幻想小学生で諦めているし、平和な日本ではこういった事には一生無縁だろうと思つていた。

だが、実際に体感してみるとどうであろうか。

何故これほど胸が躍るのだろうか。

例えるのならば体中のアドレナリンが一斉放出されている感じだ。彼は間違いなく興奮していた。

「んー、そうか？こんなただ閉じ込められているだけだぞ」

確かにプロウスの指摘は正しい。

ここは、強大な施設。即ち実験場を表している。

しかし、エイプリルはその指摘の意味も理解できないほど興奮していた。

「いや、すごいよ。間違いなく。こんなの初めてだ……………」
「！」

プロウスから見れば意味が分からないのだろう。

実際、困つたような顔をしている。

「まあ、興奮するのも分かるがこれから見ることに目を背けるな。

これは警告だ。これからお前が見ることは幸せでも絶望でも平和でも戦争でも天国でも地獄でもあるんだからな」

だからだろうか。この時の忠告を聞いていればもう少しマシな未来を迎えられたかも知れないと言っのに。

エイプリルは聞いていなかったのだ。

いや、実際には聞いていた。

ただそれが頭の中から排除されるのにそう時間は掛からなかった。

とある部屋の一室

様々な――良い意味で言えば独創的、悪い意味で言えばそのまま悪趣味な家具が連なる部屋に通されたエイプリルの目の前には白衣を着た初老の男性名前は絹威正嗣きぬいまさつぐ、この施設内の所長と名乗っていた。

「この施設は基本的に能力者の能力向上を目指す為に造られた建物だ。もちろん君以外にも能力者と呼ばれる者は多数存在する。能力は人それぞれだね。実に興味深い物もあるのだよ。例えば重力を操ったり自身の細胞を活性化させることによる身体強化、温度の高低を操る温度変化や相手の心理を読み取ったり干渉したりする能力とかね」

絹威はまるで子供が自分の夢を語るように熱中して語っていた。

(・・・・・・あ――)

段々と自分の体温が下がって行く感じがする。即ちイラついてきているのだ。

気がつくとも自分でも制御出来ないほど顔に出ていたようだった。

そこによりやく気付いた絹威はゴホンと咳払いを一つすると佇まいを直す。

「いや、すまない。醜い所を見せてしまったな。つい研究の事になると熱中してしまう。研究者の性と言うものかな」

「は、はあ」

「まあ。大して祝える物はないが我々は君を歓迎するよ」

右手を差し出す絹威とそれに答えてエイプリルも左手を前に出し、ガツシリと握手を交わす。

「こちらこそ、よろしく願います」

しかし、握った瞬間——絹威がじっとりとした眼差しで見て

いるのに気付いたエイプリルは心の中で。

（まさか。この人もマッドなのか！？）

内心ドキドキしていたのは内緒である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1714t/>

エイプリルコード

2011年5月15日16時55分発行